

呉禄貞と日本（2）

— 呉禄貞に関する伝記史料をめぐって —

李 慶 国

Wu Luzhen（呉禄貞）and Japan（2）：
A Study on Wu's Biographical Materials

Qingguo Li

Ⅳ. 呉禄貞の生年月日について

呉禄貞の生年月日については、今迄の呉禄貞に関する伝記や研究論文などでは、おおよそ清光緒六年旧暦一月二十六日（西暦 1880 年 3 月 6 日）とされているが、上記の呉の誕生日と異なっているケースは、筆者の知る限りでは三つある。その一つ、趙宗頗・夏菊芳著『呉禄貞伝』には、「1880 年 3 月 6 日（清光緒六年五月二十六日）」⁵³と記されている。旧暦のほうが西暦より先に進んでいるのはあり得ず、「一」を「五」に誤植した可能性があると思われる。二点目は、安龍禎編著『磅礪精英呉禄貞』であり、「序」（鄧凱）には、「呉禄貞將軍於 1880 年 3 月 14 日生於湖北雲夢県」（呉禄貞將軍は 1880 年 3 月 14 日湖北雲夢県に生まれ）⁵⁴と書かれているが、その根拠は示されていない。三点目は、成城中・高等学校史料室と校友会事務局に保管された『清国留学生原籍簿』（第 1 号）の名簿である。その中の「呉禄貞」の欄には次のように記されている（図 1）。

呉禄貞

居住年月日：右同

前住所：右同⁵⁵

外国に於ける居所：湖北省雲夢吳家台

生年月日：光緒七年一月二十六日

国籍：清国

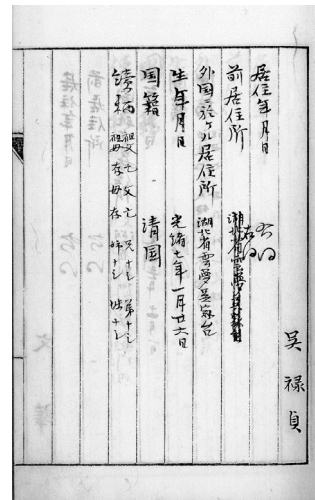


図 1 呉禄貞の頁
（『清国留学生原籍簿』）

続柄：祖父亡 父亡 兄ナシ 弟ナシ
祖母存 母存 姉ナシ 妹ナシ

この『清国留学生原籍簿』の筆跡から、呉本人が記入したものではなく、学校関連の人物（寮の管理人の可能性もある）が記入した可能性が高いと推測される。しかし、この『清国留学生原籍簿』への記載は留学生本人が登録したものを書き写したものか、あるいは本人に直接聞き取ったのかは不明である。「居住年月日」と「前住所」にはみな「右同」と書いてあるが、これは縦書きで最初に記載されたデータと同様であることを示す。呉禄貞とともに来日した清国留学生が最初に泊まった「前住所」は、「市ヶ谷河田町の成城学校校外寄宿舎」である。そして「現住所」は、最初頁の譚興沛の欄に載せる「牛込区薬王寺前町三十二番地成城学校校外寄宿舎」である⁵⁶。この名簿に記載された呉禄貞の生年月日は、通説より一年遅れている。もし仮に彼の生年月日が「光緒七年一月二十六日」であったとすれば、西暦1881年2月21日となる。しかし、「光緒七年一月二十六日」と「1881年2月21日」の記載は、呉禄貞の伝記の中にも見当たらないため、信憑性が低いといってもよいだろう。もう一つ、「続柄」の欄に「弟ナシ」と記載されていたが、実は呉禄貞には実弟の呉祐貞⁵⁷がいる。その弟は同年（1899）10月20日に成城学校に入学した。同名簿には「呉祐貞」の記載ページ（図2）もあり、次のように書かれている。

右同（現住所） 呉祐貞
外国における居住所：湖北護軍工程營、湖北省
 德安府雲夢県西門外
生年月日：光緒九年七月二十三日
続柄：祖父亡 祖母存 父亡 母存
 兄ナシ 弟ナシ 姉ナシ 妹ナシ

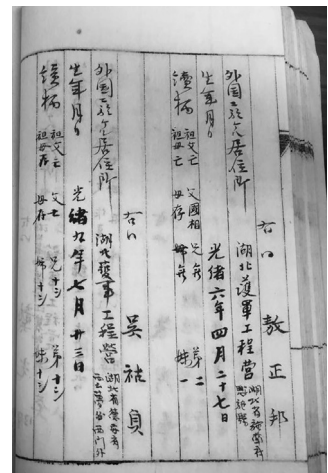


図2 呉祐貞の頁
（『清国留学生原籍簿』）

呉禄貞と同じように、呉祐貞の名簿にも「祖父亡、祖母存、父亡、母存」と兄弟「ナシ」と記載されていた。注目すべき点は、二人とも意識的に兄弟関係を隠しているようであったという点である。

呉禄貞のいとこの孫である呉厚智は、「父の叔父綏卿公の幼年時代」（「叔祖綏卿公之孩提時代」）に「ある日、彼（禄貞）がまた樹に登ったのを見て、彼より二歳年下の弟祐貞がすぐに家に駆けつけて母親に告げ口した」⁵⁸と記している。また、呉厚智は「呉禄貞年表」で、呉禄貞が「1880年3月6日（光緒六年正月二十六日）に湖北省雲夢県城西郊呉家台子に生まれる。……1883年（光緒九年）三歳、8月27日、実弟祐貞が生まれ。字は錫貞」⁵⁹

と記されている。この「年表」に記されている呉禄貞と実弟祐貞の生年月日が、仮に正確であれば、呉厚智の「父の叔父綏卿公の幼年時代」の「二歳年下」という言い方は適当でない可能性がある。また、呉禄貞の甥である呉忠亞は、「呉禄貞の一生」（「呉禄貞の一生」）の中に、「三番目の叔父呉禄貞は、字は綏卿、光緒六年（1880年）に生まれ」と書かれており、要するに、呉禄貞が清光緒七年（1881）に生まれるという記載は、『清国留学生原籍簿』にしかないため、可能性が低いといってもよい。

また、この『清国留学生原籍簿』に登録された、呉禄貞と同期の武備留学生の年齢に注目すると、年齢の差が大きく、一番年上と一番年下の生徒の差は九歳もあり、呉禄貞はそのなかでも一番年若いことがわかる⁶⁰。しかし、『清国留学生原籍簿』に記載された彼らの年齢は、いい加減なものもあり、すべてそのまま鵜呑みにはできない。具体的には、傅慈祥の生年月日は、『清国留学生原籍簿』に「光緒元年二月八日」と記載されているが、傅慈祥の息子である傅光培は「庚子漢口起事中的傅慈祥」（「庚子「漢口事件」における傅慈祥」）の中で、「私の父親は傅慈祥であり、本名は元臣、字は良弼である。湖北潜江の出身で、清同治十一年二月八日（1872年3月16日）に生まれる」⁶¹と述べている。同治十一年（1872年）と光緒元年（1875年）は三年の開きがある。即ち成城学校に入学したときの傅慈祥の実年齢は、『清国留学生原籍簿』に記載された二十四歳ではなく、二十七歳であったことがわかる。

もう一点指摘したいのは、呉祐貞の名前がよく呉祐貞と書き間違えられたことである。成城学校校友会の『卒業生名簿』の「支那学生」（呉祐貞は「第三回明治三十四年（1901年）三月卒業」）の名簿、『日本留学中国人名簿関係資料』第6巻『日本陸軍士官学校 中華民国留学生名簿』⁶²、外務省史料館の『在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生・部一』の公文書のなかにおいても、呉祐貞の名前は間違えて呉祐貞とされていた⁶³。

V. 呉禄貞と日本陸軍士官学校

呉禄貞は1899年1月（光緒二十四年十二月）から1902年4月（光緒二十八年三月）まで約三年三ヶ月の間に日本に滞在した。彼は、1899年1月から1900年7月まで成城学校で陸軍士官学校予備教育の科目（中学校レベルに相当する基礎科目、日本語、陸軍予備用の歩兵教練、体操、銃剣術の基本など）を学んだ。また9月から11月までの三ヶ月間、軍事實習を受け、同年12月には陸軍士官学校に入学し、軍事を学んだ。1901年11月陸軍士官学校卒業後には、近衛聯隊に入隊し、騎兵の見習い士官として六ヶ月ほど軍事訓練を受けながら、新兵を教えた。彼の帰国は1902年4月中旬頃であった⁶⁴（図3）。

明治三十八年（1905）11月陸軍省刊行の『陸軍省沿革史』によると、陸軍士官学校は明治七年（1874）11月に兵学校から独立し、明治十六年（1883）に開校した。その後、陸軍幼年学校、

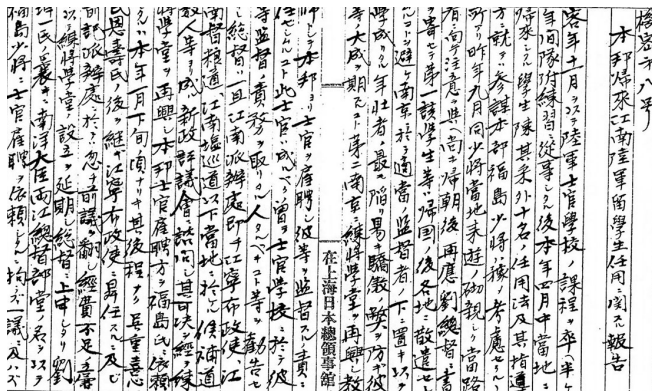


図3 在上海総領事館南京分館主任天野恭太郎より総領事への「本邦帰来江南陸軍留学生任用に関する報告」（明治35年7月16日）

陸軍戸山学校なども引き続き開校した⁶⁵。成城学校は明治十八年（1885）に陸軍士官学校の予備校として創設された。陸軍士官学校の「記録」によると、明治二十九年（1896）1月に韓国土官十一名、明治三十一年（1898）12月に韓国人留学生二十一名が入学したのだが、清国人留学生が入ったのは明治三十三年（1900）12月であり、入学者数は四十名であった⁶⁶。『陸

軍士官学校』の「陸軍士官学校の概略」によると、明治三十三年から明治四十四年（1911年辛亥革命）までに陸軍士官学校へ入学した清国人留学生の数は六百五十人に達した⁶⁷とされる。

清末の著名な教育家・外交家・社会活動家李宗棠⁶⁸は、1901年11月15日に来日し、1902年3月18日までの四ヶ月の間に日本の教育について考察した。彼は、日本政府部門や民間の知名人士を訪問し、日本の各種教育制度やそれに関連する資料を沢山収集し、多くの教育機構や学校などを見学した。また毎日、訪問先、時間、場所、訪問の内容、過程及び彼の印象と感想などを日記に丁寧に記録していた。彼は後にこれらの記録を『攷察学務日記』という題名をつけて出版した。その中、光緒二十七年十月二十七日（西暦1901年12月7日）の日記に成城学校と陸軍士官学校を参観したときの様子を次のように記している。

午後、平若道知氏と一緒に成城学校へ見学に行った。校長の岡平則録氏、中国留学生監督の奥山三郎氏、幹事の田村松之介氏が案内し、教室や講堂を見学した。生徒たちは皆起立、お辞儀をする。日本人の生徒は五百人余りで、一クラスは五、六十人ほど。授業は五つの学年室に分けられ、修身・国語・歴史・地理・博物・図画・化学・算数・生理・物理、また英文などの科目を学ぶ。学年によってそれぞれの専門教師を招聘し、学習レベルを合わせてクラスを分ける。中国人留学生は四十二人、特別な教育科目を設け、甲、乙、丙、丁の四つのクラスに分けられる。一番低いクラスは、言語以外、図画、算数を学ぶ。体操は共通科目である。博物標本室には各種の器具及び動物、植物、人体などの模型が展示されている。生徒の自習室には四人用の机があり、一つの部屋には一つか二つ置かれている。多いところでは、四つの机がある。自習の時間に余裕があれば教科以外の本を読んでもよい。寮は多くて八人部屋だ。日課が終るまで勝手に寮に帰ってはいけな。毎晩、監督が一回点呼する。外泊禁止。規約は厳正である。食事や宿泊も大変快適である。この学校は元々私立学校であるが、現在

参謀本部の協力で陸軍士官学校の予備校として認められるようになった。近年来、人気上昇、官立学校との差は殆どない。⁶⁹

また、同年十二月十日（1902年1月19日）の日記に、成城学校へ田村松之介氏を訪問した際、李宗棠は、陸軍士官学校に在学中の近衛野戦砲兵聯隊第五中隊の見習士官、清国留学生の文華（号は秀峯、荊州駐防衛）と出会い、立ち話をしたと記している。文華は呉禄貞と同期で、彼は近衛野戦砲兵聯隊に入隊しているが、呉は近衛騎兵聯隊に入っている⁷⁰。

十二月二十八日（1902年2月6日）の日記に、李宗棠は参謀本部から派遣された翻譯官末吉保馬君と共に陸軍士官学校に訪れ、その様子を次のように記している。

八時頃、末吉君が来た。彼と一緒に陸軍士官学校に行った。田中大尉が既に学校で我々を待っていた。（中略）しばらくして校長先生⁷¹と歩兵中佐の本郷房太郎氏が応接室に入り、挨拶をしてきた。その後、校長先生が中国人留学生の監教官兼将校生徒試験常置委員・砲兵大尉の間宮春四郎氏を命じ、二人の隊長が交代し、校舎、教室、宿舍、標本室、自習室などを案内してくれた。陸軍士官学校の校舎や設備などは、陸軍中央幼年学校より広い。教科も難しくなっているようである。その時、丁度二十五人の中国人留学生が教室で理化の授業を受けている。尋ねてみると、彼らは言語理解にまだ問題があるので、随時教材の内容調整を行うとのことだ。日本人生徒の学級と違い、別のクラスを設けていることがわかった。将校教官室を通ったとき、その部屋に入り、地形築城学の教官・工兵大尉田口祥次郎氏と他の講師達と話し合った。また、中国人留学生達の宿題、測量図画、試験問題などを見せてくれた。その後、日本人生徒の授業を見学した。（中略）この士官学校は高い丘にあり、キャンパスも広い。運動場には多くの障害物も作られ、操練の時、高いところに登ったり、遠く走ったり、その地形をよく利用することができる。各隊は順番に走り、戦場に臨んでいるように真剣に演練した。標本室には砲台、兵営、鉄道、軌道、山川、樹木などの木製で作った標本の種類が千百以上もあり、かなり揃っているといってもよい⁷²。

また、正月三日（1902年2月10日）に、李宗棠は通訳と青山近衛歩兵第四聯隊を見学に行った。その日の日記は次のように記している。

八時頃、通訳が来て、彼と一緒に青山近衛歩兵第四聯隊に行った。田中大尉が既に士官学校で待っていた。聯隊の警備兵が銃を持って列に並んで歓迎してくれた。総隊長の歩兵大佐梅澤道治氏と会い、当直官の歩兵大尉石浦謙三郎氏を相手にして軍制及び教練日課などについて尋ねた。また、中国人留学生の見習士官陳其采等の試験成績図表などを見せてくれ、

彼らを呼んできた。南洋から派遣された留学生五名、湖北から派遣された留学生一名。彼らは六ヶ月の隊付きをしてから卒業する予定である。各総隊長が皆練兵場に臨み、身にしみる寒風のなかで二、三時間ほど立って新兵を操練する様子を見ていた。まず、日本人の士官が新兵を訓練した。その後、陳其采に指揮をとり、隊を率いて訓練せよと命じた。それから日本人の士官と陳其采などの四人が四つの小隊を分け、中隊の合同教練を行った。兵士達は進退の足並みをしっかりと揃えていた。（中略）食事後、兵士生徒の宿舎を見学した⁷³。

李宗棠はこの日記の中で士官学校宿舎の様子や学校の施設などを細かく記している。まとめてみると、以下の通りである。正月五日（1902年2月12日）に、李宗棠は世田ヶ谷区の近衛砲兵聯隊・野戦砲兵聯隊へ見学に行った。中国留学生の盧静遠と他の四人の留学生が砲車を運輸する様子を見た。その後、馬術、戦術の訓練、また萬廷献らが新兵を率いて馬術の訓練した様子を見た⁷⁴。翌日（2月13日）に、李宗棠は近衛工兵大隊へ見学に行った。工兵大隊総隊長・工兵大佐田村義一氏が留学生の見習い士官の教育予定の授業科目を紹介し、各試験の計画表を見せてくれた。田村大佐は、留学生の学習期間が短い、もう少し延長すれば、彼らの学力精進はきっと期待できだろうと言った。李宗棠はその意見に賛成し、大変立派なご意見だと言った。その後、工兵大隊の留学生見習士官章通聲⁷⁵らを呼んできた。李宗棠は、彼らに日本人生徒の授業科目の内容などについて尋ねた。その後、雪のなかで総隊長と各士官と共に工兵達が塹壕を掘る訓練を見学した。

李宗棠の日記によると、彼は陸軍士官学校、近衛歩兵第四聯隊、砲兵聯隊・野戦砲兵聯隊、工兵大隊を見学したという。当時騎兵聯隊で見習士官をしている呉禄貞と出会ったかどうか定かではないが、上述の中国人留学生見習士官の人達は、みな呉禄貞の同期であることに違いはない⁷⁶。また、李は陸軍士官学校を見学した時、学校からもらった『陸軍士官学校の規約』の主な部分を中国語に直し、その訳文をそのまま日記に載せていた⁷⁷。この規約によれば、日本の府、県立中学校及び成城学校で五年間履修した卒業生は、そのまま日本陸軍士官学校に進学することができ、陸軍士官学校で一年間修業の後、見習士官として認められる。その後に入隊し、六ヶ月の実習を終えれば、士官として認められる。陸軍士官学校を卒業してから入隊し、一年以上経てば聯隊、大尉、中尉、少尉の軍職を与えられ、もしさらに進学する希望があれば、陸軍大臣による試験を受け、騎兵実施砲兵戸山経理などの学校や陸軍大学校に進学することもできるという。

この章は李宗棠の日記から多く引用したことは確かなことである。これほど陸軍士官学校や清国留学生見習士官の学習の内容及び訓練の様子を詳しく描いた資料は他に類を見ない。これらの資料は実に日本陸軍士官学校に関する重要な史料といえ、また清末における中国人の日本留学史研究にとっても貴重な史料であることに違いはない。

VI. 呉禄貞と日本での革命活動

馮自由は『革命逸史』の中で多くの箇所に、呉禄貞のことを記している。これらの断片的な資料を通じて呉禄貞が日本での革命活動にいかに関与し、また活躍したかをうかがうことができる。

「尤列事略補述一」には、「孫総理（孫文）は庚子（1900）年に再び来日し、横浜の前田橋百二十一番館に泊まった。そのとき、二つの革命計画を考案した。一つは留学生に連絡し、もう一つは華僑を説得することである。当時、最初に孫総理に訪問した留学生は、文科生の張継、戢翼翬、沈雲翔、秦力山、王寵惠、程家桎等、武備学生の呉禄貞、劉百剛、呉念慈、蔡鍔等であった」⁷⁸と記されている。

また、「東京高等大同学校」、「沈雲翔事略」、「勵志会與『訳書匯編』」、「康門十三太保與革命党」、「正気会及自立軍」、「賀之才述欧洲同盟会成立始末」、「庚子秦力山大通起義実録」、「庚子唐才常漢口自立軍実録」⁷⁹などでは、呉禄貞が成城学校に在学した時から、戢翼翬等の留学生と横浜へ孫文に訪問し、孫文の反清革命の理論や主張に大変感服した⁸⁰。また、彼は孫文の影響を受け、積極的に中国人留学生の組織「勵志会」に参加し、後に庚子（1900年）の「大通蜂起」のリーダーとして最前線で戦ってきたが、失敗後には清軍の包囲討伐から脱出し、日本に戻ったということ⁸¹が記されている。

呉禄貞が日本で革命運動に参加したことについて、本人自らが書いたものは殆ど残されていない。しかし、呉禄貞は1900年夏に自立軍の蜂起のため、密かに帰国し、上海から湖北武備学堂の同窓である友人の孫武⁸²に手紙を送った。この手紙は、彼が「大通蜂起」の重要な参与者と指揮者としての有力な証拠であるといってもよい。この手紙には日付がないが、「大通蜂起」の直前に書かれた可能性がある。即ち1900年7月、8月の間であろう。彼は孫武にこの絶好のチャンスを利用し、軍隊を率いてこの蜂起に助力を惜しまないよう懇切に勧めた。

小生も黄帝の後裔ですが、民族に危機が迫るのを座視するに忍びません。今度は東京で「富有会」の活動を通じて多くの会員を帰国させ、各地の革命同志に連絡し、蜂起の計画を立てようとしています。塗炭の苦しみにあった民衆を助け、漢民族の失われたものを取り戻したいと思っています。大兄は日頃国の憎しみを念じ、祖先の為に雪辱しようと誓っていらっしゃいますね。この機会に私達と共に敵愾心を燃やし、犠牲にしても国の大計をはかることができると信じています。故にお手紙を差し上げます。大兄は直ちに漢皋に赴き、唐才常、傅慈祥のお二人と相談し、早めに軍を率いて敵を殲滅してくださいようお願い申し上げます。この逃してはならない好機を是非おつかみください。敵への憎しみと以前の約束

をしっかりと覚えていらっしゃると思います。多くの人々のため、くれぐれも躊躇せず、道を誤らないよう行動をなさってください。また秘密にご企画いただき、慎重にお進み下さい。大いに期待しております⁸³。

差出人の署名は「同窓の小生呉禄貞 百拝」である。しかし、残念ながら、この「大通蜂起」は、経費未達や蜂起延期の通達が届かなかったため、前線指揮者の秦力山と呉禄貞は、計画の通りに8月9日（七月十五日）安徽大通で蜂起を起こしたものの、衆寡敵せず、失敗に終わった。そして自立軍の総指揮の唐才常、中軍の指揮者傅慈祥などの二十八人は清軍に逮捕され、処刑された。呉禄貞は危うく虎口を脱して再び日本に戻った。この「大通蜂起」の経過や結末については、馮自由の『革命逸史』、張難先の『湖北革命知之録』及び各種の回憶録等でも紹介されている⁸⁴。

孫文は、1912年3月17日に呉禄貞を追憶する「祭文」のなかで、「昔在東海，談笑相逢。倡義江淮，建牙大通（昔、日本でお会いしたとき、談笑が絶えなかった。江淮蜂起を提案し、自ら大通蜂起を指揮した）」⁸⁵と、呉禄貞の革命功績を高く評価した。

錢基博は、『呉禄貞伝』で次のようなエピソードを描いている。甲辰年（1904）到北京で禄貞が「友人と酒を飲んでほろ酔い機嫌のよいとき、彼は同席の人達に大声で『諸君、庚子の夏で安徽の大通厘局を占領した事件を覚えているかい？誰がやったか知っているか？』と言った。同席の人達はみな驚いて声も出なかった。禄貞は右手で満杯の酒を持って左手を自分の鼻に指さして『皆様を騙してはいけないぞ、俺だよ』と言いながら、酒を飲みほした。その場にいた良弼、姚錫光は顔を見合わせ、びっくりして顔が真っ青になった」という。良弼と姚錫光は当時清朝陸軍の重鎮である⁸⁶。良弼は清朝貴族で、呉禄貞の成城学校と陸軍士官学校の後輩で親友である。姚錫光は湖北武備学堂兼自強学堂総督で、呉禄貞と師弟のような関係を持っている人である。彼らは呉禄貞と傅慈祥が「大通蜂起」に参加したことを全く知らないはずはないが、呉本人が皆の前で公然に認めたことに大変驚いたことだろう。錢基博は、呉禄貞が意気軒昂で素直で他人を疑わない性格を持つ人であるため、自ら警戒を顧みもせず災いを招いたと大変残念なことだと慨歎した⁸⁷。

以上から、呉禄貞は留学生時代から孫文の影響を受け、積極的に留学生の組織「勵志會」に参加し、また自ら「反清」の革命蜂起を組織し、指揮したことがわかる。

最後に、多くの呉禄貞の伝記には、清国留学生会館の開館式で呉禄貞が留学生代表として挨拶を述べ、この留学生会館をアメリカの「独立庁」（Independence Hall）と喩えて、留学生達がこの会館で革命活動を行う拠点となるよう期待していると記されている。ところが、この会館に関連する情報は間違っただけが多い。

具体的には、趙宗頤・夏菊芳著『呉禄貞』には「この年（1900年）秋冬の時、呉禄貞が一部の急進的な留学生達と東京神田区駿河台鈴木町十八番地で中国人留学生会館を設立した」⁸⁸と書かれている。また、胡玉衡は『九邊处处蹄痕—呉禄貞傳一』で、「開館の日、呉禄貞は演壇に立

ち演説した。彼は会館をアメリカフィラデルフィアの独立庁（Independence Hall）と喩え、自分自身を百姓のための自由・平等をめざす中国版ワシントン（George Washington）とたとえていた。彼は悠然と語り、出席者達は、彼の識見の深さ、卓越した思想と優れた人間魅力に魅せられ、鳴りやまない拍手を送った」⁸⁹と述べている。朱宏啓・安龍禎の『呉禄貞傳』では、この件について、「1902年2月21日（夏曆壬寅年正月初三）、留学生達が東京で新年懇親会を開いた。出席の留学生は二百七十四人であった。その後、東京神田区駿河台で清国留学生会館を設立した」⁹⁰と述べている。もう一つ、呉桂龍の「呉禄貞出国留学及卒業回国時間補考」（「呉禄貞の出国留学及び卒業後帰国の時間についての補足と考証」）の論文には、『清国留学生会館第一次報告』を引用し、呉禄貞が留学生会館に関する活動を順番に紹介している。その中で、1902年2月10日（壬寅年一月三日）、清国駐日公使蔡鈞が東京九段坂の偕行社で留日学生の旧正月の親睦会を開き、呉禄貞に留学生会館を設立する件について演説をしてもらった。その後、会館規定を起草する八人のメンバーを選定したが、呉禄貞がその一人であった。3月16日に東京神田区の錦輝館で留学生大会が開かれ、会館の規定を検討し、幹事を選挙した。呉禄貞が十二人の幹事の一人に選ばれた。3月30日に東京駿河台鈴木町十八番地で開館式が開かれた。呉禄貞が来賓代表として祝辞を述べた⁹¹と記されている。呉の論文に書かれた記事は当時の清国留学生会館の『報告』によるものであるが、信憑性が高いと思われる。

しかし、以上の資料の中で明らかに不適当だと思われるものもある。まず、趙宗頤・夏菊芳の『呉禄貞』は「中国留学生会館を設立した」という時期は「1900年の秋冬」ではなく、1902年3月末である。次に胡玉衡の『九邊處處蹄痕—呉禄貞傳—』は、呉禄貞が中国留学生会館「開館の日」の講演で彼を「中国版ワシントン」にたとえた言い方は、根拠なく作者がつくったものではないかと思われる。その次、朱宏啓・安龍禎の『呉禄貞傳』は、「壬寅年正月初三」は1902年2月21日ではなく、2月10日である。だが、ここにおいては、関連資料を使って呉禄貞と留学生会館での活動をさらに明らかにしてみたい。

馮自由は「記東京中国留学生会館」で、次のように述べている。「この年（1901年—筆者）秋冬の間に、中国人留学生会館の管理組織が作られた。会館は駿河台にあり、外観が大変立派で、各省の学生が全体の大会を開き、若干名の幹事を選出し、日常の事務を処理してもらう。開幕（開館）の日に、湖北省出身の士官学校の学生である呉禄貞が開館式の挨拶を行った。彼は、この会館は中国にとって、全くアメリカの独立庁（Independence Hall）のようなものに等しいと述べた。」⁹²

実藤恵秀は『中国留学生史談』で、1950年2月のある日、清国留学生会館の遺跡を訪ねていったが、「当時の町名でいえば、神田区駿河台鈴木町十八番地。ここは震災後、町名あらたまって、神田区駿河台二丁目三番地になった」と述べている。また、この清国留学生会館は、当時いかなる機能もはたした。「それは、明治時代、留学生全盛期における、かれらの中央本部であり、俱

楽部であり、講習会場であり、出版本部であり、事あるときは、ここが運動の本部となる」とも指摘した。これによって、清国留学生会館は、留学生の宿泊施設だけではなく、『譯書匯編』などの留学生の各種雑誌の出版社でもあり、留学生組織の集会などの活動舞台となった。清国留学生会館がいつ頃にできたか、明確ではないが、「1901年あたりから、全中国の統一的な会館の必要がおこり、1902年のはじめ、清国留学生会館がうまれた」⁹³と述べている。筆者は実藤恵秀『中国留学生史談』と譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』に書かれた「清国留学生会館」の遺跡（図4）を現地調査した。



図4 「清国留学生会館」跡（現在、
神田駿河台2丁目3番地、2019
年11月2日筆者

李宗棠は来日したとき、清国留学生会館がまだできていなかったため、彼の『攷察学務日記』の中で何回も留学生会館のことにふれた。初めて言及したのは1901年12月24日（辛丑年旧暦十一月十四日）、「蔡公使に拝晤し、留学生在会館を設立することをはかる」、翌日、「午前、使署に至り、留学生会館のことを促し詢う。公使は躊躇うようだ」。1902年1月10日（十二月一日）、「午後、蔡公使を拝し、また留学生会館を創辦せんことを述べた」、1月21日（十二月十二日）、「夜、留学生の章宗祥ら十九人、ともにきて会館を捐建せんことを議論した」、その三日後の25日（十二月十六日）、「午前、蔡公使を拝し、会館のことを話した」、その翌日も、「夜、客が多く来た。留学生会館のことをみな討論した」、1月30日（十二月二十一日）、「留学生の洪竹蓀ら来て会館のことを聞かれた」、2月2日（十二月二十四日）、「蔡公使に書簡を書いて会館のことを督促した」、2月16日（壬寅年正月九日）、「中国人留学生達が神田区錦町の錦輝館に借りて新年会を開き、会館の規約を討議した。私は用事があるので行かなかった」と記している⁹⁵。

李宗棠は、「錦輝館」に借り、留学生の「新年会」を開いたと述べていたが、その「錦輝館」は東京都東京市神田錦町（現在の東京都千代田区神田錦町3-3）にある。3月14日（二月六日）に、李宗棠は帰国前の最後に留学生会館のことを言及した。「黄伯愚が東京に行くから、彼に留学生会館への寄付金を蔡公使に手渡すと頼んだ。詳しくは後に書簡で送る」⁹⁶と記されている。以上の『攷察学務日記』によると、清国留学生会館の設立はなかなか容易に実現できないようであった。蔡公使は留学生会館の設立について、躊躇ったようであるが、李宗棠は何度も蔡公使に訪ねて頼んだり督促したりした。蔡公使が躊躇した理由は不明だが、李宗棠の帰国の前には留学生会館の開館式がまだ行われていないことがわかる。

清国留学生会館について、最近の研究には孫安石の「清国留学生会館研究初探—「国家」と「愛国」のはざま—」⁹⁷がある。この論文から、『清国留学生会館第一次報告』は京都大学に所蔵されていることが判明した。筆者は京都大学人文研附属東アジア人文情報学研究センターでこの『清

『清国留学生会館第一次報告』を調べ、その中の「偕行社之記事」、「會館之成立」、「會館大事記」を読んでみると、呉禄貞と清国留学生会館との関りは、呉桂龍の「呉禄貞出国留学及畢業回国時間補考」（「呉禄貞の出国留学及び卒業後帰国の時間についての補足と考証」）という論文に書かれているとわかった。以下は、李宗棠『攷察學務日記』を参照し、補足したいと思う。

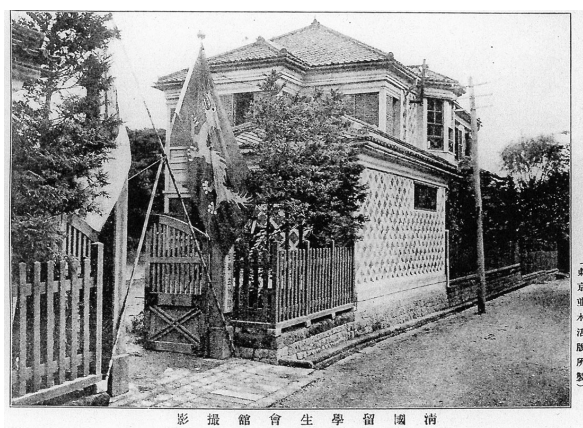


図5 原清国留学生会館（『清国留学生会館第1回報告』1902年9月）

その後、呉禄貞を含む八人の留学生が会館の「章程」を起草する委員を選出した⁹⁹。2月17日（一月十日）に上野の韻松亭で起草委員会を開き、章程を起草した。3月16日（二月七日）に錦輝館の公議会館で留学生大会を開き、「章程」を討議し、留学生会館の幹事を選挙した。選挙された幹事は十二人で呉禄貞がその一人で、接待幹事を担当している¹⁰⁰。3月19日（二月十日）上野の三宜亭で幹事会を開き、会館館内の規則を決めた。1902年3月30日（二月二十一日）に東京神田区駿河台鈴木町十八番地で開かれた留学生会館（図5）の開館式は、呉禄貞が来賓代表として祝辞を述べた。この祝辞が実に彼の帰国の告別の挨拶になったようなものである。

留学生会館設立の提案は、1901年12月下旬からあがったが、呉禄貞は最初の提案者と推測することができる。「偕行社之記事」には壬寅一月三日（1902年2月10日）に東京九段坂の偕行社で開かれた留学生（参加した留学生は二百七十四人⁹⁸）の旧暦新年会で、蔡公使は呉禄貞に留学生会館の設立について講演をしてもらったと記している。また、「會館大事記」には、その日、「呉禄貞が最初に留学生会館の設立を提案したが、皆賛同し、公使に伺い、公使も賛

お わ り に

本文は「呉禄貞と日本」(1)の続きで、主に呉禄貞が日本の成城学校と陸軍士官学校での留学及び革命活動などに関する史料を考察してきた。今迄の呉禄貞の伝記や彼に関する研究論文の中のいくつかの不明点や不適当であると思われる記載を明らかにした。具体的には、呉禄貞の赴日と帰国の時期、彼の成城学校の入学と卒業の時期、陸軍士官学校の入学と卒業及び入隊見習いの時期、成城学校で学んだ科目、学習内容と成績、陸軍士官学校での学習科目と学習内容などである。また、呉禄貞の日本での革命活動、「大通蜂起」などの史実、呉禄貞と留学生会館の設立に

関連する活動などを考察した。本文では主に日本外務省外交史料館・防衛省防衛研究所による『外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂』の公文書などの原文記録、成城中高等学校校友会事務局・史料室に保管された清国留学生に関する貴重な資料、清末の著名な教育家・外交家李宗棠の『攷察学務日記』、『清国留学生第一次報告』などを利用した。呉禄貞と日本について、もう一つの課題が残っており、則ち呉禄貞と斎藤季治郎の「師弟」関係のことで、別の論文で検討したいと思う。

-
- 53 趙宗頤・夏菊芳『呉禄貞』、上海人民出版社、1982年5月。頁1。
- 54 鄧凱「序」による。安龍禎編著『磅礴精英呉禄貞』（紀念辛亥革命・紀念呉禄貞殉難100周年專輯）、中国国際図書出版社、2011年9月。頁1。中国語原文の日本語訳は特に記さない限り、筆者が訳したものである。以下同。
- 55 前居住所は最初に「湖北雲夢台」と記入し、後に二線を引いて「右同」に訂正した。
- 56 『成城学校百年』によると「牛込区原町二丁目五十二番地の校外寄宿舎」という住所であるが、『清国留学生原籍簿』の最初の頁の住所記載（譚興沛の欄）と異なっている。原因不詳。頁68。
- 57 呉禄貞の実弟呉祐貞の名前は呉祐貞と間違えたことがよくある。呉厚智の「呉禄貞年表」（呉忠亞・呉厚智著『百年呉禄貞』、湖北人民出版社、2011年3月）によると、呉禄貞の実弟の名前は呉祐貞（Wu Huzhen）であることがわかる。また、「叔祖綬卿公之孩提時代」（同上書）にも「怙真」（Huzhen）と書いている。「祐貞」と「怙真」の発音（Huzhen）は同じであるが、「真」は間違った。
- 58 呉忠亞・呉厚智著『百年呉禄貞』による。頁002。
- 59 同58、頁235。
- 60 劉邦驥 同治13年5月1日（1874年、入学時の年齢：満24歳、以下同）、呉元澤 光緒2年6月25日（1876年、23歳）、田吳昭 光緒元年五月五日（1875年、23歳）、呉茂節 光緒六年三月十一日（1880年、18歳）、盧静遠 光緒五年四月一日（1879年、19歳）、顧臧 光緒元年十二月三日（1875年、23歳）、呉祖蔭 光緒五年十月二十九日（1879年、19歳）、劉廣雲 光緒元年一月二十四日（1875年、23歳）、鐵良 同治十三年七月二十六日（1874年、24歳）、高曾介 同治十一年十月二十九日（1872年、26歳）、呉紹璘 光緒四年六月十三日（1878年、20歳）、徐傳篤 同治十二年四月（1873年、25歳）、鄧承拔 光緒五年九月二日（1879年、19歳）、杜鍾岷 光緒五年九月二十八日（1879年、19歳）、易甲鵬 光緒六年七月十四日（1880年、18歳）、傅慈祥 光緒元年二月八日（1875年、23歳）、呉禄貞 光緒七年一月二十六日（1881年、17歳）、文華 光緒五年十一月一日（1879年、19歳）、萬廷猷 光緒二年二月二十四日（1876年、22歳）。
- 61 傅光培「庚子漢口起事中的傅慈祥」（『庚子『漢口蜂起』における傅慈祥』）（『湖北大学学报』（哲学社会科学版）、1982年05期）、「緬懷先父傅慈祥—紀念庚子漢口起事八十周年」（「亡父傅慈祥を追想する—「庚子『漢口事件』八〇周年を記念して」（『湖北文史資料』第2輯、湖北人民出版社、1981年）、傅光培、傅光植「事略」に「先考生於壬申二月初八辰時、庚子七月二十八日寅時就義、得年二十有九」（「亡父は壬申年二月八日辰時に生まれ、庚子七月二十八日正義のために亡くなった。享年29歳だった」と述べている。ここでの壬申年は公暦の1872年である。張難先『湖北革命知之録』（上海、商務印書館民国三十五年五月）も同じように同治十一年（1872年）とされる。
- 62 日本陸軍士官学校印・郭榮生校補『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』、文海出版社、民国六十四年（1975）8月。
- 63 注57参照。明治32年（1899）10月19日付の在上海総領事代理小田切萬壽之助による「湖広総督張之洞派遣留学生出發ノ件」の付録「神戸丸（十月二十一日上海出帆）ニテ先發スル留学生」のなかに「呉祐貞」

と書いている。また明治 34 年（1901）6 月 11 日付の陸軍省送達第 767 号、陸軍大臣男爵児玉源太郎より外務大臣殿宛の御通知の付録に「第一師団歩兵第一聯隊に入隊した清国留学生のリストに「呉祐貞」とされた。胡玉衡著『九辺処跡痕一呉祐貞傳』（台湾、近代中国出版社、民国 71 年（1982）10 月）には「呉祐貞」とされた。

- 64 陸軍士官学校の第一期中国留学生の帰国時間については、拙作「呉祐貞と日本（1）一呉祐貞に関する伝記史料をめぐって一」（『追手門学院大学 国際教養学部紀要第 10 号』2017 年 1 月 30 日）で 1902 年 4 月に帰国したと指摘した。李宗一「呉祐貞」（中国社会科学院近代史研究所 李新・孫思白 主編『中華民国史資料叢稿 民国人物伝』第二巻）はこの時間を示している。もう一つの史料は国立公文書館・アジア歴史資料センターの公文書「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍学生部 I」の 0311、0312 号に掲載された在上海総領事館南京分館主任天野恭太郎より総領事小田切萬壽之助への「機密第 8 号 本邦帰来江南陸軍留学生任用に関する報告」（明治 35 年 6 月 16 日日付）である。その中に「客年十一月ヲ以テ陸軍士官学校ノ課程ヲ卒、半ヶ年間隊附練習ニ従事シタル後本年四月中當地ニ帰来シタル陳其采外十名ノ任用法及其指導方ニ就テニ」という言い方から、陸軍士官学校の第 1 期留学生達は四月中旬に帰国したことがわかる。以前に呉祐貞の留学時期及び帰国の時間について、聶柏成「關於吳祐貞留日畢業回国的時間」（『江漢論壇』第 5 期、1987）、呉桂龍「吳祐貞出国留学及畢業回国時間補考」などの論文がある。筆者の論文は以上の問題について解決済と言ってもよい。
- 65 山縣有朋監修、堀内文治郎・平山正執筆『陸軍沿革史』（松下芳男解題）、日本評論社、昭和 17 年（1942）11 月。
- 66 日本陸軍士官学校印・郭榮生校補『日本陸軍士官学校 中華民國留学生 名簿』（日本留学・中国人名簿関係資料 第 6 巻）によると、第 1 期学生（40 名）（明治三十三年十二月入学、同三十四年十一月卒業）。その名簿には、歩兵、騎兵、砲兵、工兵に分けて登録される。騎兵の中に呉祐貞の名前が載っている。呉祐貞より半年前に成城学校に入学した蕭星恒（歩兵、湖南調査）、段蘭芳（歩兵、湖南長沙）、徐方謙（工兵、湖北湖北府）は呉祐貞達と同時に入学し同時に卒業した陸軍士官学校の第一期の武備留学生であった。
- 67 山崎正男編集『陸軍士官学校』（昭和 44 年 9 月初版、45 年 1 月再版、秋元書房）によると、明治 33 年（1900 年）清国学生 40 名；明治 34 年（1901）清国学生 25 名；明治 36 年（1903）清国学生 94 名；明治 39 年（1906）清国学生 78 名；明治 40 年（1907）国学生 257 名、明治 41 年（1908）清国学生 55 名；明治 42 年（1909）清国学生 54 名；明治 43 年（1910）清国学生 47 名などという記載がある。頁 25。
- 68 李宗棠（1870-1923）は安徽省潁上生まれ、字は柏蔭と隱伯、別号は江南史隱、千倉旧主。「安徽遊歴官二品頂戴按察使銜江蘇候補道」として、1901 年 11 月 15 日に来日し、4 か月の滞在中、日本の教育について考察した。その以降、彼は 1908 年まで 9 回も来日し、また日記で考察の時間、任務、日本の政府と民間との交流などを細かく記載し、後に『考察警務日記』、『査辦学生案日記』、『護送游学生官紳学生日記』、『送児婦行日記』、『勸導留生日記』などを出版した。
- 69 李宗棠「考察学務日記」、『東游紀念』、黄山書社、2016 年 1 月。頁 19。
- 70 同注 69。頁 56。
- 71 当時の陸軍士官学校の校長は少将の高木作蔵、明治 32 年から明治 37 年までの任期である。
- 72 同注 69。頁 62。
- 73 同注 69。頁 78。
- 74 同注 69。頁 80。
- 75 国立公文書・アジア歴史資料センターの公文書「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍学生部」の番号 0210「陸軍省伝達送甲第 1551 号」に陸軍士官学校に入学した清国留学生名簿（45 名）の「工兵大隊」の名前の中に「南洋 章適駿」という名前が載っている。また同公文書 0289 号、清国公使蔡鈞より日本外務大臣男爵小村壽太郎閣下への 2 名の陸軍士官学校を卒業した南洋の留学生の半年延期の願いという書簡（明治 35 年 3 月 28 日）の中に章適駿の名前がある。上の公文書と同じで「章適聲」ではなく「章適駿」で

ある。以上によって李宗棠の「日記」に書き間違えた可能性があることがわかる。

- 76 陸軍士官学校に入学した中国留学生達がそれぞれ近衛歩兵第1聯隊、第2聯隊、第3連隊、第4聯隊、騎兵聯隊、野戦砲兵聯隊、工兵大隊に入って見習士官として実習・訓練をしている。李宗棠の「日記」に言及した陳其采は歩兵第4聯隊、文華、盧静遠、萬廷献は野戦砲兵聯隊、章通駿は工兵大隊に所属している。
- 77 李宗棠は『陸軍士官学校規約』の第1章総則、第2章職制、第3章応募定則を翻訳し、そのまま日記に載せている。同注69、頁63～76。
- 78 馮自由「尤列事略補述一」、『革命逸史』初集、『馮自由回憶録』上、頁28。もう一つの説は最初に孫文に謁見した留学生は戢翼翬、呉禄貞、傅慈祥、劉道仁、呉祖蔭、萬廷献、呉元澤の六人である。傅光培「緬懷先父傅慈祥—紀念庚子漢口起事八十周年」(『湖北文史資料』第2輯、湖北人民出版社1981年)に参照。
- 79 『馮自由回憶録』(上、下)所収。
- 80 「沈雲翔事略」で「雲翔偕同学戢翼翬(元承)、呉禄貞(綏卿)訪之、一見如故、対総理(孫文)尤傾倒備至」(雲翔が同学の戢翼翬(元承)、呉禄貞(綏卿)と一緒に孫総理(孫文)に訪問し、初対面なのに古くからの友人のように意気投合する。特に総理に傾倒した)。『馮自由回憶録』(上)、58頁。
- 81 「大通蜂起」というのは「呉禄と日本(1)」の注3を参照。
- 82 孫武、元の名前は孫葆仁、字は堯卿、湖北夏口柏泉の出身。湖北共進会会長、辛亥革命で武昌蜂起のリーダーの一人である。湖北武備学堂で呉禄貞と傅慈祥と一緒に軍事を学んだ。1899年、母親に止められ、呉禄貞等と日本へ留学に行きたかった。卒業後、威武營小隊長、湖南新軍教官、岳州威武營管帯を歴任した。庚子(1900年)に彼が唐才常と蜂起を計画し、岳州司令に選ばれた。大通、漢口、新堤に相次いで蜂起失敗後、彼は広東に脱出した。
- 83 この書簡は上海から湖南の孫文に郵送したものである。1911年漢口の『強国報』に掲載されているそうである。筆者は呉忠亜・呉厚智著『百年呉禄貞』(湖北長江出版集団・湖北人民出版社、2011年3月)により引用。筆者が原文(文語文)を日本語に訳した。訳文は書簡の全部ではなく、後半の一部である。
- 84 馮自由「秦力山事略」「沈雲翔事略」「庚子秦力山大通起義実録」「庚子唐才常漢口自立軍実録」などがある。『革命逸史』に所収。張難先「庚子漢口之役」、胡石庵「烈士唐才常事略」、黃復「潜江傅君良弼墓表」、章炳麟「秦力山傳」などは『湖北革命知之録』(張難先著、商務印書館1945年初版。翌年再版；商務印書館2011年再刷)に所収。
- 85 「孫中山祭文」による。『近代史資料』総第25号。
- 86 良弼(1877-1912)は清末の大臣。1900年1月15日に成城学校に入学し、陸軍士官学校清国留学生の2期生で、呉禄貞と仲良しの友人である。帰国後、陸軍部軍学司監督副使、司長などを歴任。姚錫光(1857-1921)、江蘇丹徒の出身、かつて湖広総督張之洞の幕僚を担当した。1898年2月に自強学堂総稽察として来日し、陸軍省・文部省・陸軍士官学校などを視察し、帰国後、報告書を張之洞に提出した。張はその報告書を読んでから両湖から100名の留学生を派遣することを決定した。姚は当時陸軍部左丞、右侍郎、弼德院顧問大臣を担当している。
- 87 錢基博『呉禄貞伝』は二つの版本がある。一つは『呉禄貞伝略』(近代史資料創刊『辛亥革命』所収)、もう一つは『呉禄貞伝』(張難先『湖北革命知之録』所収)。筆者は後者より引用。
- 88 同注53、頁24。
- 89 胡玉衡『九邊處處蹄痕—呉禄貞傳』(台湾、近代中国出版社、1982年10月)、頁27。
- 90 朱宏啓・安龍禎『呉禄貞傳』(中国国際図書出版社、2013年9月)、頁31。
- 91 呉桂龍「呉禄貞出国留学及畢業回国時間補考」、『史林』、1989年第1期。
- 92 馮自由「記東京中国人留学生会館」(東京中国人留学生について)、《革命逸史》第三期。『馮自由回憶録』下、東方出版社、2011年10月。頁627。
- 93 さねとうけいしゅう『中国留学生史談』、第一書房、昭和56年(1981)5月。頁134。
- 94 譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』、白帝社、2016年8月。

- 95 元の清国留学生会館は神田区駿河台鈴木町 18 番地（現在神田駿河台 2-3-16）であるが、李宗棠が「中国留学生が神田区錦町錦輝館を借りて新年会を開き、みな会館の規約を討議する」という。馮自由『革命軌史』に書かれた「呉禄貞が新年の挨拶をした」というエピソードは同じことに違いない。
- 96 同注 69。頁 45 ～ 114。日本語訳は実藤恵秀『中国留学生史談』を参考したものである。頁 135 ～ 136。
- 97 孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』、東方書店、2019 年 3 月。
- 98 『清国留学生会館第 1 回報告』の「偕行社之記事」に留学生参加者は 274 人ですが、「會館大事記」に「この日、参加者は 240 余人」と記されている。どちらの数字が正確であるか不詳。
- 99 「章程」を起草する委員は呉禄貞の他、金邦平、范源濂、呉振麟、章宗祥、曹汝霖、程家禔（程君は病によって陸仲芳を頼んだ）、高逸がいる。
- 100 留学生会館「職員表」には総長（公使）蔡鈞、副長（監督）錢恂、書記幹事范源濂、蔡鍔、錢承鈇、呉振麟、会計幹事陸世芬、王璟芳、庶務幹事章宗祥、金邦平、書報幹事曹汝霖、張紹貞、招待幹事呉禄貞、高逸である（『清国留学生会館第 1 次報告』より）。